子ども学、保育学、そして…（雑感）

白梅学園大学・子ども学部 子ども学科
教授 近藤 幹生

はじめに

子ども学へのアプローチは、本誌において展開されてきている[i]。子どもにかかわる諸問題は山積し、その解明が求められており、確立への途上に位置する学問分野とはいえ、子ども学への期待は少なくない。本稿では、子ども学が、学際性・総合性をもつ学問であることを念頭に置きながら、本学ならではの可能性について考えてみたい。子ども学の研究対象について、子ども学部の研究者が総合的アプローチをめざす、ということになるだろうか。続いて、保育学にかかわり学問分野の専門分化と、あらたな学問領域を創造する「夢」について、私見を述べさせていただく。

研究対象の総合的把握を地道にすすめること

子ども学の研究対象をどう考えるかについて、講座の企画に参画させていただいたことがある[ii]。各講義は、自然科学的アプローチ、子ども学の歴史や子どもの権利、教育行政から子ども学への期待等であり、総括的に表現するのは力量不足である。だが、この経験から、保育、教育、福祉、心理などの実践現場の課題、研究

上の知見を駆使して連携する努力の必要性を認識できた。子どもにかかわる諸問題は、さまざまな実践現場で起こっている。テーマをしぼり、実践者と研究者（教育、福祉の行政担当者等も）からなる研究協議をかさねることができる。

深刻化するいじめ問題は、報道される特定地域だけの課題ではないし、子どもの成長・発達には片時も休みがない。本学は、この問いに積極的にアプローチする責務があるのではないか。解決方向が容易ではないとしても、地域の実践者と本学の研究者とが、英知を結集して事例報告や研究協議をかさねることから、課題はより鮮明になるといえる。根深さをもちかつ緊急性があるので、慎重な配慮や研究姿勢は不可欠だとしても、地域の実践現場では、専門分野、隣接領域にある研究者との連携・協動を求めている。本学における保育、教育、福祉、心理の各専門分野の研究者間の連携をすすめ、地域のネットワークを構築すること、研究レベルの質的向上をめざすことに、微力をつくさねばと考えている。

いじめ問題等の特定課題ではなくても、保育実践、教育実践をどう創造するのかという面で、本学への期待や可能性がある。例えば、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校等の実践者と本学の研究者とが、テーマを鮮明にし、同一のテーブルで研究協議をかさねることにより、相互の実践の位置づけ、研究者の役割を深め合い課題解決への糸口を探求することができ得る。

保育所、幼稚園、小学校低学年の実践者と共同研究する機会に参加しているが[iii]、実践交流、研究協議の継続により、自らの実践、研究の位置づけを深化させ現場へ戻ることができる。

どんぐりコマの実践事例（保育所・小学校）と研究協議の概略[iv]を紹介しておく。

―A保育所：5歳児が、散歩で数種類のどんぐりを拾ってきて、ごっこあそび（ままごと、おみせやさんごっこ等）をした後、どんぐりコマをつくる。キリを使っての穴あけは保育者がおこない、軸を自分でさして仕上げる。ごっこあそびを繰り返してから、どんぐりは、砂場に持ち込まれ小山でころがして楽しくあそんだ。ごっこあそびは、保育者の予想をこえて継続した実践となっていった。

B小学校：1年生、2年生合同の生活科授業で「どんぐりコマづくり」をした。どんぐりコマの製作は、教諭も援助をしたが、基本的には自分で取組んだ。コマを回す競争にも主眼が置かれた。「どのコマがよく回るか」、「なぜよく回るか」と、子どもたちへ投げかけた。コマを見ているだけではなく、「どのくらいの時間、コマが回っているか」を問い、声で「いち、にい、さん・・・」と唱えることから、時間を計る「○○秒、まわってい

た…」という認識へ導いていった。「なぜ、よく回るか」ということから、軸の長さ（センチメートル）を計ることへ関心を持たせていった。研究協議で印象的だったのは、小学校教諭が、保育所の5歳児にあそびの自由さがあること、ダイナミックな展開に新鮮さを感じるという発言であった。また、保育者側からは、保育所でのどんぐりコマの実践が、就学後に、発展させられていくことに興味・関心を持ったという。就学前の課題として、あそびの経験を拡大することが、就学後の科学的認識への芽生えを導く側面があることも、議論のなかから共通して認識できた面がある。―

A保育所の保育者とB小学校の教諭とは、研究集会において初めて研究協議をすすめたもので、保・小の一貫した連携事例とはいえないが、実践現場における保育実践、教育実践を振り返る契機にはなっていった。各実践現場では、実践を意識化し、創造的に展開するためにも、研究者との連携を求めていることを痛感した。

限られた経験からの提起ではあるが、本学は、地域における子ども学の諸課題に、積極的に取組むことができるのではないか。すでに、さまざまな地域や現場で取組まれている事例もあり、研究成果を学び合いたい。諸問題の複雑さは、異なる専門領域、近接領域が協働することを求めている。子ども学の研究対象を、総合的視野からどう把握できるのか、小規模な研究協議をかさね、問題解決への方向性を切り拓きたい。地道であっても確実なアプローチが必要ではないだろうか。

保育学の専門分化、保育学への問い

日本保育学会は、1948年創設以来65年の歴史をもち、会員数も4000名を超えている。研究者と共に、保育所、幼稚園をはじめとする実践者の加入者も増えてきた。当然のことだが、研究者と実践者の共同研究成果も報告されている。会員数の増加とともに、従来の口頭発表の他に、ポスターセッション、自主シンポジウム等が設けられるようになった。専門の学会誌『保育学研究』も、発行回数が増やされてきている。

こうした中で、問われているのは「保育学とは何か」という本質的問題だといえる[v]。

保育学の現状、内容を考える視点の一つとして、日本保育学会の大会の口頭発表の区分を見る。「保育内容、保育所・幼稚園のあり方、保育者論、心身の発達、保育理論、保育思想、保育制度や行政、保育史、幼小連携、地域社会と保育」とある。このように、保育学の研究分野は多岐にわたり、専門分化してきたことがわかる。保育学会会員には、自らの専攻の研究領域がどこに属

するかを、記入することを求めている（保育学原理、乳幼児心理学、小児保健・小児栄養、保育内容（5領域）、乳児保育、特別に援助を要する子の保育、保育実践（現場）研究、保育者養成、子育て支援、地域の専門機関との連携、児童文化、児童福祉、諸外国の保育、ジェンダー・世代間交流、保育経営、その他）。筆者は、「保育学原理、保育内容言葉」とし、本学ホームページには、保育学（保育所のあり方、言葉、就学課題、保育史）と標記し追究している。

保育学は、学際性・総合性をもつといわれるが、端的に言えば、毎日の保育実践には、幅広い諸科学が相互に関連し反映されるということである。この点は、実践と研究が往復するなかで認識されるはずで、保育実践者と保育学にかかわる研究者とが、対等・平等な姿勢をもち追究する必要がある。研究者の側から見たとき、幅広く、かつ専門分化してきた保育学の研究成果を、実践現場に返す努力が求められる。また、実践現場における研究的努力も少なくなく、従来指摘されていない知見が、保育現場から導かれていくことも増えていく可能性が強い。

近年、保育者養成課程のある大学教員の採用条件（公募）として、修士号をもち、かつ保育者としての実践経験を有することが（保育士、幼稚園教諭）求められている。保育所、幼稚園等の現場経験があることをもって、自動的に保育学の研究者とはいえないが、この意味と役割を考える必要がある。保育学研究の充実・発展、つまり乳幼児期の保育・教育の学問的追究には、実践現場を土台とした、実践者と研究者との連携が欠かせないことが、明確化されてきたからではないか。

新たな学問領域、学会設立への「夢」[VI]

保育学は、独自の学会として65年の歴史をもつが、専門学問として十分な社会的認知を得ていないと考える。この点は、筆者も含め会員自らが問い続ける課題である。自身の模索として、保育学（保育所のあり方、言葉、就学課題、保育史）のこだわりをもち研究を深化させること、同時に、新たな学問領域の創造をめざす若手研究者たちと力を合わせていきたい。

保育内容学という新たな学問領域を構築すべき、という若手研究者たち（保育者経験をもつ研究者）から、強い意志が寄せられた。保育内容学会の設立をめざす準備会をスタートさせて4年間が経過しようとしている。準備会の議論では、以下5点の柱について研究協議をかさねてきている。①実践と乖離しない研究の必要性、②保育内容「各論」が充実する必要性、③保育内容「各論」を結びつける「総論」の必要性、④保育内容の核となる「保育内容学」の必要性、⑤実践を経

験する中で感じる課題を議論する必要性。

日本の保育所・幼稚園等には、歴史性・地域性を持ち、多様な存在形態がある。営まれている一つひとつ実践に光をあてたい。準備会での議論や検討も、この姿勢を貫いてきている。同時に、保育現場からみた、保育政策のあり方や制度論についても議論をすすめてきた。保育の場という概念も、時代と共に変容してきた。保育所・幼稚園のみが施設保育をする場ではなくなってきており、保育内容の定義についても、議論を積み上げているさなかである。２０１１年以降、日本保育学会の場で自主シンポジウムを開催し、２０１２年には、第１回研究大会を関西地域のメンバーと合同でおこなうなど、研究の輪を広げてきた。保育実践と保育研究とが、二分されるのではなく、互いに切磋琢磨し合い実践を核とした研究のあり方を模索するつもりでいる。幅広い方々の参画、批判をのぞみたい。

Ⅰ 金田利子「子ども学への期待」、小松隆二「子ども学の源流と先駆者たち、子ども学の先駆者たち①」、無藤隆「子ども学をどう進化させるか―白梅学院大学院からの挑戦」、首藤美香子「子ども学試論」他。『地域と子ども学』創刊号、2号、3号、4号に各連載論考も含めて掲載。

Ⅱ 本学教育福祉研究センター・子ども学研究所『白梅子ども学叢書3』、２０１０、他。

Ⅲ 長野県教育研究集会「幼年期の保育と低学年の教育問題」分科会（２００７年より共同研究者）

Ⅳ iiiの分科会報告を要約。

Ⅴ 小川博久「保育学の学問的性格をめぐって―学会活動のあり方を考える手がかりとして―」聖徳大学研究紀要、人文学部、第17号、63―70、２００６年。汐見稔幸監修・木村歩美編著『保育学を拓く』萌文社（２０１２年）等に注目している。

Ⅵ 保育内容学会準備会ホームページ http://www.geocities.jp/hoikunaiyou/sub1.htm